

保育記録「プリンセスごっこ・プリキユアごっこ（4歳児）」について

－役・保育者の関わり・子どもの人間関係に焦点を合わせて－

松島英恵¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

本研究は、4歳児の「プリンセスごっこ・プリキユアごっこ」の保育記録を分析することにより、「ごっこ遊び」における保育者の援助について考察することを目的とした。4歳児の「ごっこ遊び」の展開を支える援助について悩む保育者の記録を、八木の提唱した「オモシロサの5要素」の視点から分析することによって、保育者の視点の偏りや思い込みなどの課題が浮かび上がった。本研究で取り上げた保育記録からは、好きな遊びの時間に自然発生する「ごっこ遊び」では見逃されがちで、役になりきり演じるために必要な援助を工夫すること、保育者と子どもの思いの間に生じているずれを自覚すること、子どもの人間関係についてありのままを受け止めることが、「ごっこ遊び」を支える保育者の援助の見直しにつながるということが明らかになった。

(キーワード) 4歳児、人間関係、保育者の関わり、「ごっこ遊び」、保育記録

1. 研究の目的

「ごっこ遊び」は保育現場において日常的に見られる遊びであり、好きな遊びの時間に自発的に行われるままごとのような遊びや、学級全体活動などで保育者主導の店屋や劇遊びのような遊びなどいろいろな遊びがある。保育用語辞典によると「ごっこ遊び」は、「子どもが日常生活の中で経験したことの蓄積から、つもりになって『~のような』模倣をし、身近なものを見立てて役割実現をするというような象徴的な遊び」¹⁾とされている。

高橋(1989)は「ごっこ遊び」について、「ソロのふり遊びが社会化された形態」であり、「複数の子どもが参加して、各々が役割を分担し、役割にふさわしい『ふり』の行為を演じつつ、一定のテーマを織り成していく遊びである」としている²⁾。1人でなりきって遊んでいるのは「ふり遊び」であり、友達と一緒にいることが「ごっこ遊び」の条件の一つであるといえる。また、ガーヴェイ(1977)は「ごっこ遊びを行うことは主としてコミュニケーションの問題」であると述べた。友達と「ごっこ遊び」をするためには「何をしていた、物が何を表しているのか、どこにいるかを示す手法」が必要とする為である³⁾。「ごっこ遊び」は友達と行う遊びであり、遊びとして成り立つにはコミュニケーション能力が不可欠であるということである。したがって、保育の中で「ごっこ遊び」ができるように支えるということは、コミュニケーション能力、つまり人間関係を築く力を育成するということにつながるといえる。少子高齢化で、人と関わる機会が減少している現代の子ど

もにとって、保育所・こども園・幼稚園において「ごっこ遊び」は経験すべき遊びであり、「ごっこ遊び」を支える保育者の役割は大きい。ところが筆者の保育現場経験において、「ごっこ遊び」が苦手であり、どう支えていいのかわからないと悩む保育者に会うことが増えた。また筆者自身も「ごっこ遊び」が停滞している場合に、どのような援助が必要なのか悩み続けた経験がある。河邊・田代(2020)は「ごっこ遊びの育ちを見ると、そのクラスの育ちがわかるという一面」があるとし、「ごっこ遊びは、最も援助が難しい遊びの1つであると考えます。」⁴⁾と述べている。そこで、本研究では、保育記録を分析することを通して「ごっこ遊び」支える保育者の関わりを探っていきたいと考える。

「ごっこ遊び」については、社会言語的なアプローチで「ごっこ遊び」に迫ったガーヴェイ(1980)⁵⁾や、イメージ形成などの発達の問題に着目した高橋(1989)⁶⁾などに代表される発達心理学的なアプローチの研究だけでなく、さまざまな視点からの研究がなされている。「ごっこ遊び」における役割に注目した利根川(2021)⁷⁾、まごとのモノやコーナーに焦点をあてた二橋・上田(2012)⁸⁾、子どもが空間だけでなくモノとの身体的関わりを通して意味空間を構成していく活動として捉える視点が必要であると唱えた長橋(2013)⁹⁾などさまざまな研究がみられる。どの研究も、保育実践上の指針となり得る貴重な研究であるが、保育実践の現場では「なんだかうまくいかない」「これで子どもは楽しいのだろうか」など漠然とした課題や疑問を追求し省察することなく、どこに焦点を当ててアプロ

*連絡先：松島英恵 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

一ちしたらよいか定まらないまま、場当たりの援助を繰り返してしまうことがある。まず保育者自身が抱える保育の課題を明確にしなければならない。

八木（1992）は、師岡ら保育実践者中心の研究において保育現場での「ごっこ遊び」の実践を現状分析するにあたり、子どもが感じる「ごっこ遊び」の「オモシロサ」からの解明を試みた。「生活保育」を目指す立場から、子どもの主体性を課題の中心に据え「子どもは、それをオモシロイと思うからこそ、やるのだ」という考えから出発したものである¹⁰⁾。無藤（2018）は平成30年度施行「幼稚園教育要領」の解説とポイントとして、幼児教育においては、子どもが周囲の環境からの刺激を受け止め、自ら興味をもって身近な環境に主体的に関わりながら活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験を重ねていくようにするものと述べている。子どもが環境とのかかわり方や意味に気づき、取り込もうとしたり試行錯誤したり、考えたりすることが幼児教育の成り立つ要とし、このような見方や考え方を生かし、子どもと共によりよい教育環境を創造するよう努めることと解説している¹¹⁾。子どもが興味をもって環境に関わることを支えるためには、保育者は子どもが何に興味をもって活動しているのかを的確に捉えなければならない。「ごっこ遊び」への援助を考える際にも、子どもの興味・関心、すなわち子どもが感じている遊びの「オモシロサ」を捉えることが重要となる。

また、河邊・田代（2020）は、4歳児期の特徴を「友達の存在を感じながら遊ぶようになってくる時期」とし、自分がやりたいことをそれぞれ楽しみながら、友達のしていることや社会生活・情報の取り入れ、遊びのイメージの緩やかな共有、仲間意識の芽生え等が見られるようになり、保育者の援助として「ごっこ遊びとごっこ遊びがつながり、周りの友達とつながることで自分の遊びがさらに楽しくなり充実感を感じるよう、育てていくことが重要」¹²⁾と述べている。4歳児期は、「ごっこ遊び」の充実と友達との関わりが連動しており、「ごっこ遊び」を支えることは、4歳児の人間関係を支えることにもつながるといえる。

そこで本研究では、4歳児の「ごっこ遊び」の援助に悩む保育者の保育記録を、八木の提唱した「ごっこ遊び」の「オモシロサの5要素」を中心とした視点から分析することを通して、保育者が「ごっこ遊び」に対して抱えていた課題を明らかにする。明らかとなった保育者の課題を考察することにより、4歳児の「ごっこ遊び」を支える保育者の関わりについて探っていきたい。

II. 八木の理論－「ごっこ遊び」の「オモシロサの5要素」著書『ごっこ遊びの探求－生活保育の創造をめざして』¹³⁾より－

八木は「ごっこ遊び」を保育に取り入れることの意義を

明らかにし、保育実践の際の指針を提示するべく、師岡ら保育実践者が中心の研究会をもち、「ごっこ遊び」の理論化に取り組んだ。彼ら実践者は、「生活保育」を保育像として子ども自らが主体となって生きる力を育むことを目指し、「ごっこ遊び」を「子どもが日常生活の中で出会う全ての事柄の中で、出来事そのものに印象づけられたり、子ども自らが興味や関心を持つ中で、自らをその行為や役割のなり手となって遊ばれるものの総称」¹⁴⁾と捉え、子どもの生活の中心にあるものとして保育に取り組んでいた。

また、「ごっこ遊び」の意味を「自らを表す場」「本質を探究する場」「自己世界を拡大する場」「生きる力を拡充する場」の4つの視点から整理し、「ごっこ遊び」は「子どもが人間として生きていくうえで必要となる人とのかかわりや、文化との出会いを通して、様々な知識や技術を獲得していく場」であり、「人間になっていく道程の中でどうしても体験し、生きる力を確かなかたちで獲得していかなければならない世界」とした¹⁵⁾。そして、保育実践に至るための指針を示すべく、「ごっこ遊び展開させていく要素」として、「役＝～になるオモシロサ」「物＝～をつくる・つかうオモシロサ」「行為＝～をするオモシロサ」「空間＝～にするオモシロサ」「人・かかわり・組織＝～とするオモシロサ」の5つを挙げている¹⁶⁾。5つの要素についての説明をまとめると次のようになる。

- ① 役＝～になるオモシロサ：子どもが、自分以外の人や動物、架空の存在の役になり演じることを楽しむ姿であり、「ごっこ遊び」の中心的な位置を占める。対象となる役の特徴を模索したり、演じながらその典型をみつけたりしていく。
- ② 物＝～をつくる・つかうオモシロサ：ある物や素材を「ごっこ遊び」のテーマにかかわる中で他の物に見立て、意味化していくことを楽しむ姿であり、象徴化に向けて働く他、造形活動的な姿にもなる。
- ③ 行為＝～をするオモシロサ：役に伴う動作や行動を楽しむ姿であるが、動作や行動そのものを楽しむこともでき、役割を捉えず、遊びのテーマから逸脱した姿となることもある。
- ④ 空間＝～にするオモシロサ：生活空間を、現実とは異なる他の場として見立て、意味化することを楽しむ姿であり、「ごっこ遊び」の空間を生み出す姿である。物を利用することと同時に行われることが多いが、物のない空間を見立てられるようにもなっていく。
- ⑤ 人・かかわり・組織＝～とするオモシロサ：自分以外の人そのものや、その人とのかかわりあい、また互いに関係を捉えて行動しあうことを楽しむ姿であり、並列的・共存的・融合的といえるステップをたどると考えられる。ただし、組織化への道程は容易ではなく、リーダーが「ごっこ遊び」を取り仕切る姿も見

せることもある。¹⁷⁾

以上の5つの要素の比重は、常に同じではなく変化するものであり、その比重変化が「ごっこ遊び」の内容的変移をもたらすが、5つの要素は常に変わらずに存在していると考えられている¹⁸⁾。また5要素同士の中での相性もあるとし、その関係性を捉える中で必要な保育者の援助もみえてくるとした¹⁹⁾。

また5つの要素に対する子どもの興味・関心が「ごっこ遊び」の原動力になるとし、個々の興味・関心のレベルによって5要素の比重が異なり、他の子ども達との関わりの中で共感・反発し合ったりするというような、子どもがもつオモシロサの5要素の関係性も見えておくべきであるとした²⁰⁾。友達との中で面白さが重なり合わない力を異化、互いに引き合う力を同化とし、異化はトラブルや混乱、遊びの崩壊も招くが、「ごっこ遊び」を発展、活性化させることもできるものとして捉えるべきであるとした²¹⁾。

さらに、「ごっこ遊び」を発展させるエネルギーとしてイメージ力、テーマ性、役割文化、社会性、組織性の5つをあげた。「オモシロサの5要素」とは違った角度からの視点をもつことで、構造的に「ごっこ遊び」を捉えようとした²²⁾。

八木らは、「ごっこ遊び」の詳細な事例を、遊び展開毎に5要素を中心に、異化や同化、5つのエネルギーなどの視点もふまえて分析し、5要素の比重を捉えながら、「ごっこ遊び」を支える保育者の援助について考察し、保育実践につなげようとした。利根川も述べているように「オモシロサの5要素」は、「ごっこ遊び」を考察する視点として現在でも有効であり²³⁾、保育者の記録から子どもの興味や関心を捉え直すための視点となり得る。本研究では、八木の「オモシロサの5要素」を中心に、異化や同化などの視点も参考にしながら保育者の記録を分析し、「ごっこ遊び」における保育者の援助を検討する。

III. 研究の方法

筆者が関西地方のA幼稚園（国立）4歳児を担任していた20XX年の1年間の「週の記録」より、「ごっこ遊び」に関する記録を分析する。A幼稚園は3歳児2クラス（B組C組）、4歳児2クラス（D組E組）、5歳児2クラス（F組G組）からなり、1クラスの平均人数は23名であった。この年のA幼稚園では4歳児に進級する際にクラス替えを行っていた。その為、筆者が担任していた4歳児D組は、元3歳児B組12名と元3歳児C組11名で構成されていた。

「週の記録」は週のねらい、内容、環境構成と教師の援助、行事、全体活動、好きな遊びの時間の遊びの記録、省察が記録されている。好きな遊びの時間の記録には、その週に見られた子どもの遊びについて遊びの名前、子どもの姿や捉え、環境・援助について感じたことや反省、次週の

援助の方向などについて書いている。

研究の方法については、20XX年4歳児D組の好きな遊びの時間に見られた「ごっこ遊び」の中から、援助について長期間試行錯誤を重ねていた「ごっこ遊び」の記録を選び、「オモシロサの5要素」の視点を用いて分析し、保育者の抱えていた課題を明らかにし、「ごっこ遊び」の援助について検討する。

記録については、個人情報特定されないように、子どもの名前はアルファベットとし、園庭の遊具の固有名称は一般的な名称にする。口語体や、省略した記述も多いため、（ ）内に補足を付け足した。

IV. 結果と考察

IV-1. 好きな遊びの時間に見られた「ごっこ遊び」について

20XX年のA幼稚園4歳児D組の「週の記録」より、好きな遊びの時間に見られた「ごっこ遊び」については、表1の通りである。「ごっこ遊び」に記号をつけ、ほぼ同じメンバーで継続された「ごっこ遊び」については同じ記号をつけている。「ごっこ遊び」以外にも虫捕りや鬼ごっこ、水遊びなど季節の遊びや運動遊び、製作なども記録されているが、表1では「ごっこ遊び」のみまとめている。また、A幼稚園では4歳児の1年間のI～VI期に分けて教育課程を編成しており、20XX年はI期3週（4月）、II期5週（5～6月）、III期5週（6～7月）、IV期7週（8～10月）、V期9週（10～12月）、VI期10週（1～3月）、計39週であった。表では何期の何週目かがわかるように表記にしている。

Ⅲでも述べているように、4歳児に進級した際にクラス編成が変わっていた為、進級当初は、元B組と元C組の子どもが分かれて遊ぶことが多かった。このような姿はどの園でもクラス替えを行うと見られる姿であるが、この年の子どもたちは互いになじむまでに時間がかかり、同じような遊びが長く続くが発展性に乏しいと感じられた。「ごっこ遊び」の発展や活性化と、クラスの子どもの多様な関係性を築く事が関連していると捉え、試行錯誤した一年であった。

中でも表1の太字㊦プリンセスごっこ・プリキユアごっこは、元B組の女児5人がほぼ一緒に過ごし、同じような内容の遊びが繰り返され、他の遊びに移行してもまた復活し、I期からIV期まで継続したが、発展性が乏しいと捉え保育者として悩みを抱えていた。㊦プリンセスごっこ・プリキユアごっこをしていた子どもたちは、IV期の運動会後、ほぼクラス全員の子どものみで取り組んだ㊧ハロウィンごっこを契機に、やりたい遊びが広がり始め、㊨あやとりマジックショー（あやとりショー）や、㊩レストランなど新たな遊びを自分たちで作り始めると同時にいろいろな友

達と関わって遊び始め、Ⅵ期には②犬・猫ごっこなどで互いを受け入れながら遊ぶようになっていった。同じように発展性の乏しさに悩んだ「ごっこ遊び」として④恐竜ごっこもあったが、主に遊んでいた子どもたちが「ごっこ遊び」よりも運動遊びの方に関心のあった子どもが多かったため、援助の方向も運動遊びに重点をおいていた。本研究では「ごっこ遊び」への保育者の援助に注目するため、⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっこの記録を取り上げる。

Ⅳ-2. ⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっこについて

⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっこの記録分析表が表2である。遊びの名称について、通し番号(1)～(3)の進級当初は「プリンセスごっこ」、(4)～(8)が「プリキュアごっこ」に変わり、(7)の週に「ダンスショー(プリンセス)」という名称も書き足されている。その後、(9)～(11)は「プリキュア学校ごっこ」となっている。2学期に入り(12)「プリキュアショー」「白雪姫ごっこ」、(13)～(15)「プリキュアごっこ」、(15)では「ダンスショー」も書かれている。10月の(15)でこの遊びは終焉を迎えているのだが、11月と12月にそれぞれ(16)「プリキュアごっこ」、(17)「ダンスショー」が記録されている。(16)と(17)に関しては、他の遊びが停滞した時に、以前の遊びを思い出して遊んでいた程度と捉え、特に援助はしていなかった。

遊びの名称が「プリンセスごっこ」→「プリキュアごっこ」→「ダンスショー」→「プリキュア学校ごっこ」→「プリキュアショー」「白雪姫ごっこ」→「プリキュアごっこ」「ダンスショー」と変わっている。その名称ごとに「ごっこ遊び」としてのまとまりがあると考えられるが、遊んでいるメンバーがほとんど変わらず、同じような遊びが続いていた。ドレスなどを着て、何かの役になったと宣言し、何かを作る、逃げる・踊るといった行為をするパターンが繰り返された。本研究では(1)～(17)までを⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっことして、同じ「ごっこ遊び」として取り上げることとする。⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっこの遊びのメンバーである元B組の女兒5人は、遊び以外の場でも常に一緒に過ごしたが、友達との関わりが広がっていきにくいことに保育者は悩んでいた。遊びの内容の変化が、友達との関わりの変化につながるのではないかと考え、試行錯誤していた。

表2には、「週の記録」に書かれていた「遊びについての記録」について八木の「オモシロサの5要素」の視点から改めて捉え直したものを「捉え直した遊び・子どもの姿」、捉え直した遊びや姿から考えられる環境・援助については「環境・援助」として記載した。「オモシロサの5要素」の視点から分析した結果、「①役＝～になるオモシロサ」について記録がないことが多く、例えば表2(2)のように、馬車に乗れるようにするなど遊びのストーリーを保育者

が提案したり、表2(7)(9)のように城や学校などの見立てる空間を提示したりしているが、「演じる」ことへの援助についてほとんどふれていない。また、前述の保育者が提案したストーリーや、遊び空間などが、子どもの思いとずれており、遊びの展開につながっていかなかったのではないかと考えられる。さらに、元B組の女兒5人の子どもの人間関係についての捉えが不十分であったことも課題としてあげられる。保育者の課題として浮かび上がった役・保育者の関わり・子どもの人間関係について、次節で考察する。

Ⅳ-3. 3つの課題

Ⅳ-3-1. 役-「①役＝～になるオモシロサ」を支える援助-

八木は「①役＝～になるオモシロサ」について「これがないとごっこ遊びは出発しないといえるほど、全てのごっこ遊びにおいて中心的な位置を占めるもの」としており、「つもり→なる→演じる→担う→つもり」という循環を「①役＝～になるオモシロサ」のシステムとして示している²⁰⁾。4歳児の「おうちごっこ」の事例から、スカートなどを身につけて変身することも「①役＝～になるオモシロサ」であり、物によって触発されたことが「ごっこ遊び」の動因としている²⁰⁾。そこからの遊びの発展の姿として、次に自分の役割を担った「③行為＝～をするオモシロサ」が見られるようになり、行為をするにあたって「②物＝～をつくる・つかうオモシロサ」「④空間＝～にするオモシロサ」へとオモシロサの要素の幅が広がっていき、仲間が拡大し、異化と同化をしながら組織化し、遊びはピークを迎えると示している²⁰⁾。

表2の「遊びについての記録」を見ると、(1)～(3)の「プリンセスごっこ」の段階で、子ども達はドレスを着てプリンセスに変身しているが、行為が生まれえないため、次週(2)において保育者は「紐通してネックレスを作るような物や、「舞台・馬車」などの空間を用意し、保育者の示したストーリーと一緒に遊んでいる。しかし次の(3)にはアイテムを製作する「②物＝～をつくる・つかうオモシロサ」が独立し、「ごっこ遊び」ではなく製作遊びとなり、プリンセスとしてこれがしたいという思いが子どもにわきおこらないまま、さらに翌週(4)に、テレビアニメの「プリキュアごっこ」になっている。

テレビアニメを見ている子どもが多く、「プリキュアごっこ」の方が行為を生みやすかったと捉えられる。子ども達は(4)に書いているように「たたかいごっこ」のような行為を始め、(5)では「地球を守る」という目的を持ち始めるが、「コンサートをしたい」という思いを持つようになり、遊びの方向が2つにわかれる。しかし元B組女兒5人が一緒にいることを強く求めている時期であり、2つのグループに分かれることなく、一緒にいながら一貫性のない遊

保育記録「プリンセスごっこ・プリキュアごっこ（4歳児）」について

表1. 好きな遊びの時間に見られた「ごっこ遊び」（20XX年A幼稚園4歳児D組）

学期	月	期	週	好きな遊びで見られた「ごっこ遊び」	行事	備考	
1	4	I	1	㊦プリンセスごっこ、㊧お家ごっこ、㊨花屋（レストラン）	始業式、入園式		
			2	㊦プリンセスごっこ→お城と馬車、㊩警察ごっこ			
			3	㊦プリンセスごっこ、㊫船	誕生会		
	5	II	1	㊭プリキュアごっこ、㊫船作り、㊬バーベキューごっこ			
			2	㊭プリキュアごっこ、㊩警察ごっこ、㊫船ごっこ	内科健診、異年齢交流		
			3	㊭プリキュアごっこ、㊫船ごっこ→お店屋	眼科健診、異年齢交流、誕生会 親子遠足（水族館）		
			4	㊭プリキュアごっこ→ダンスショー（プリンセス）、㊫船ごっこ→ペンギンショー、㊭イルカショー、㊮ジャガーショー	異年齢交流		
	6	III	5	㊭プリキュアごっこ、㊯電車ショー、㊰消防署ごっこ、	保育参観		
			1	㊭プリキュアごっこ、㊫船ごっこ、㊱恐竜ごっこ	5歳児お店屋、歯科検診、交通安全教室		
			2	㊭プリキュアごっこ、㊱恐竜ごっこ、㊯電車ごっこ、㊲ラッコごっこ	誕生会、プール開始、異年齢交流		
		3	㊭プリキュアごっこ、㊱恐竜→チンパンジーバーベキューごっこ、㊲ラッコごっこ→スイミングスクールごっこ、㊳動物ごっこ				
		7	4		短縮保育、七夕会	遊ぶ時間が少なかった	
	5		誕生会、終業式				
	2	8	IV	1	㊴サメの餌やり	誕生会、プール納め	
				9	2	㊲病院ごっこ、㊱恐竜ごっこ	始業式、異年齢交流
9		IV	3	㊭プリキュアごっこ→姫ごっこ、㊲病院ごっこ、㊱恐竜ごっこ	異年齢交流		
			4	㊭プリキュアごっこ、㊱恐竜ごっこ、㊴写真スタジオ	異年齢交流、誕生会		
			5	㊭プリキュアごっこ、㊱恐竜ごっこ、㊴写真スタジオ、㊵映画館、㊶弁当屋		運動会合同練習	
			10	6	㊭プリキュアごっこ→ダンスショー、㊱恐竜・スズメバチごっこ→警察・消防ごっこ、㊵映画館	運動会予行、運動会	
			7	㊷ハロウィンごっこ	異年齢交流		
10		V	1	㊱恐竜ごっこ→警察ごっこ、㊷ハロウィンごっこ、㊸あやとりマジックショー、㊹あやとり教室	異年齢交流	「ごっこ遊び」ではなくとも、あやとりをする姿は継続的に見られた。	
			2	㊲病院ごっこ、㊱秘密基地、㊳レストラン	異年齢交流、誕生会		
			3	㊲病院ごっこ、㊹あやとり教室、㊱秘密基地（変な家）、㊳レストラン	異年齢交流		
			4	㊹あやとり教室、㊱秘密基地（お化け屋敷）、㊳レストラン、㊴お話劇場			
11		V	5	㊹あやとり教室、㊱秘密基地（忍者→恐竜→スパイダーマン）、㊳レストラン、㊴お話劇場	保育参観		
	6		㊴カメレオン→恐竜ごっこ、㊴スパイダーマンごっこ	5歳児お店屋、遠足、誕生会、音楽鑑賞会			
	12		7	㊭プリキュアごっこ、㊸あやとりショー、㊴お笑いショー	作品展、やきいも、異年齢交流		
12	V	8	㊷忍者ごっこ	異年齢交流、誕生会			
		9	㊭ダンスショー、㊵映画館、㊹あやとり教室、	クリスマス会、終業式			
3	1	VI	1	㊳レストラン、㊴家作り（カメレオン）、	始業式	「桃太郎」の劇遊びをしていた	
			2	㊴パントマイムショー→恐竜ごっこ、㊴アイドルショー、㊳マジックショー、㊴犬ごっこ、㊫船ごっこ（桃太郎）→宇宙ステーション、	誕生会		
			3	㊴犬→猫ごっこ→お家ごっこ、㊫船ごっこ（桃太郎）、㊱恐竜ごっこ	防犯教室		
	2	VI	4	㊴猫ごっこ・恐竜ごっこ・学校ごっこ	生活発表会		
			5	㊱秘密基地（恐竜→鬼→カメラマン）、㊴猫ごっこ→ペットショップ→お家ごっこ、㊴結婚式ごっこ、㊴宇宙ショー	保育参観		
			6	㊴猫・犬ごっこ、㊴宇宙映画、㊲病院ごっこ→動物病院、㊴警察ごっこ		4歳児お店屋準備	
			7	㊴猫ごっこ、㊴警察ごっこ	異年齢交流		
	3	VI	8	㊴お化け屋敷、㊴猫ごっこ	ひなまつり		
			9	㊴おもしろショー、㊴猫ごっこ	4歳児お店屋、誕生会		
			10	㊴猫・ビーバーごっこ	お別れ会、終業式		

表2. ㊦プリンセスごっこ・プリキュアごっこの記録分析表

記録時期	遊びについての記録	5要素からの分析	
		5要素から捉え直した遊び・子どもの姿	考えられる環境・援助
(1) I-1 4月	プリンセスごっこ ・2日ほどドレスを着ているだけだったが、元B組女児が(進級)前と同じ遊びで安心する。テラスでお城をつくれるようにしている。	①ドレスを着てプリンセスに変身している。 ②記録なし ③行為なし ④プリンセスの空間が必要。 ⑤同じクラスだった友達と一緒にいたい。	・装飾品作りの材料や舞台を準備する。 ・保育者も一緒に遊びながら信頼関係を築く。 ・プリンセスごっこの場が、居場所となるよう見守る。
(2) I-2 4月	プリンセスごっこ ・ドレスの取り合いはあるが、ドレスを着て紐通してネックレスを作り、紙でごちそうを作り、時々舞台上で踊ったり馬車に乗ったりしているが、ストーリーはない。居場所として必要。盛り上げていこう。 ・プリンセスが多く、元B組女児が居場所をつくりにくいので、補助の保育者が盛り上げる。ベンチを馬にして、羽をつけ、騎手と、乗る人にわかれる。羽を動かせるようにして楽しい。	①馬車に乗り、お城に行く場面を保育者が設定し、それに準じて演じている。 ②なりきるための装飾品作りや、ごちそう作りという造形活動をしている。 ③馬に乗る、羽を動かす行為を楽しむ。 ④保育者が設置した舞台や羽を付けたベンチを城や馬に見立てている。 ⑤騎手と馬車に乗る人に分かれる。遊びは保育者が中心である。	・装飾品などが作れる材料を準備する。 ・保育者が一緒に遊び、プリンセスの世界観を広げる為にお城や馬車を用意し、他のストーリーを思いつくように話をする。 ・他に見立てられるような道具や教材、イメージを引き出す絵本など準備する。
(3) I-3 4月	プリンセスごっこ ・ドレスを着ているだけというか、ドレスの取り合いなのだが。冠やネックレス、リボンなどのアイテムを製作しておそろいを楽しむ。なりきるためのグッズを作っていて、「ごっこ遊び」ではあまりない。 ・時折、姫たちがごちそうを作り出す。ピーズを食材にしないことを確認。紙を切ってご飯を作る。	①プリンセスに変身したつもりになっているが、演じる姿は見られない。 ②プリンセスらしく装うためのアイテムを作る造形活動をしている。 ③行為なし ④見られない ⑤友達とお揃いの物を身に付けることで仲間であることを確認している。	・プリンセスのイメージを共有できるような絵本など準備する ・装飾品などが作れる材料を準備 ・物だけでなく、行為や空間の工夫で仲間意識や、居場所をつくる援助をする。
(4) II-1 5月	プリキュアごっこ ・元B組女児たちが、ごちそう作りか音楽コーナーで(遊びを)終わると、始める。5歳児がいなくて(空いている)サッカー場で「○○よ!」とキャラクターの名前を叫びながら逃げて(たたかっ)ている。そうすると男児がきて、本格的なたたかいごっこになっていく。役割があるといいのではないか。	①○○役と名乗り、たたかう場面を演じる。プリンセスよりも何をするか思いつく。 ②記録なし ③たたかう場面の追いかっこのような行為そのものを楽しみ、テーマから逸脱していく。 ④たたかうために、ある程度広い空間をあそび場に設定している。 ⑤元B組の友達と一緒に過ごしたい。キャラクターになっているが、役割分担はない。	・たたかう以外の特徴に気付けるようにストーリーを提案する。 ・必要な物や空間と一緒に準備し、見立てながら遊びのテーマ性がもてるようにする。 ・保育者が一緒に遊び、信頼関係を築き、安心して過ごせるようにする。
(5) II-2 5月	プリキュアごっこ ・スカートを(はいて)プリキュアごっこをしている)女児がだんだんイメージをもつように(なってきた)。「地球を守る」という目的をもつ。たまにコンサートをしたいらしく、イメージをどうするかふらふらしているので、保育者の仲介が必要。	①プリキュアの特徴として「地球を守る」ことと「コンサートをする」ことの2つがある。 ②スカートを(はいて)いる。 ③「地球を守る」目的がうまれたが、「コンサート」をする姿もある。 ④記録なし ⑤2つのイメージが繋げるのに保育者が必要である。	・保育者も一緒に遊びながら、共有できるイメージをつくりだす援助が必要である。 絵本などの共通体験となる経験の保障も考えられる。 ・遊びのイメージが共有できるような物や空間と一緒に準備する。
(6) II-3 5月	プリキュアごっこ ・スカートを(はけば)プリキュアになっている様子。「地球を守る」と言っているが、(中心メンバーの)a児が休みだと、各自製作していることが多い。グッズはよく作っている。ジュースも作る。	①演じる姿は見られない ②スカートのプリキュアの印となっている。装飾品作りの造形活動である。 ③特に見られない。 ④記録なし ⑤a児がイメージリーダーであり、不在だと遊びのテーマが乏しくなる。	・保育者が一緒に遊び、a児の代わりにイメージリーダーを担い、演じる楽しさや、空間を見立てる面白さに気付けるようにする。
(7) II-4 5月	プリキュアごっこ・ダンスショー(プリンセス) ・遊べないプリキュアを保育者がだいぶひっぱって、舞台や城を用意し(補助の保育者)、ダンスショー。カセットで「アナと雪の女王」(を流すと、)熱唱とダンス。(隣の)船作りの子ども達からも見られるように(舞台を)設置。 ・ダンスショーをしていない時は、家をつくって家族ごっこのようにしている。倒れたプリキュアに薬を飲ませて看病していた。	①プリキュアやプリンセス、家族など何になりきっているのかあいまいである。 ②記録なし ③ダンスや熱唱、倒れたプリキュアの看病などの行為を楽しんでいる。 ④保育者の用意した舞台や城をダンスショーの場としている。城を用意したことで、イメージがあいまいになった。 ⑤ダンスを見せる人、見る人、看病する人、看病される人の役割分担が見られる。	・絵本などの物語を読む機会をもつなどして、あいまいなイメージを明確化させ、共有できるような物や空間と一緒に用意する。 ・行為そのものの楽しさを十分味わえるように、必要な曲などの物や舞台などの空間を用意する。 ・ダンスを見る客や、必要な相手役を仲介したり、保育者が担ったりする。
(8) II-4 5月	プリキュアごっこ ・雨が(続くと)プリキュアごっこが復活。	①③なりきって演じている子どもと、そうでない子どもがいる。「人を探す」ストーリーを	・遊びのストーリー作りを援助する。

保育記録「プリンセスごっこ・プリキュアごっこ（4歳児）」について

II-5 6月	イメージある子と、ない子がいる。やるならイメージをみんながもてるように設定を共有できる援助、基点となる場や物が必要。プリキュアの家をつくって、人探しをする（イメージの）子どももいるので、一緒にすればいいのに。	演じている子もいる。 ②④イメージを共有し、遊びの起点となるような物や空間が必要である。 ⑤同じ遊びをしているつもりだが、それぞれのイメージでバラバラに遊んでいる。並列的である。	・天候に関わりなく遊びのイメージを共有できるような物や場を準備する。 ・必要な相手役を仲介したり、保育者が担ったりする。
(9) III-1 6月	プリキュア学校 ・恐竜（ごっこの子ども達に）に追いかけて「キャーキャー」と言って（逃げ）るだけなので、何になるか、何をつくるか、何をするか、保育者と一緒に話をし、一緒に遊ぶ。（園庭）のテント下に机を運んで学校にする。恐竜（ごっこの子ども達）が様子を見にくる。続けたい。	①逃げていだけである。 ②記録なし。 ③恐竜ごっこを受け入れているが、追いかけてそのものを楽しみ、プリキュアのイメージは消えている。 ④保育者を中心に「プリキュアの学校」という空間を作る ⑤何になり、何を作り、何をするのか保育者と話をすることで成り立っている。	・遊びのストーリー作りを援助し、何になるか、何をするか自分たちで思いつくように話し合いをしたり、空間を作ったりする。 ・遊びが安定するまでは他の遊びからの影響を受けにくい空間にする。
(10) III-2 6月	プリキュア学校 ・保育者主導だが、「やろう！」という子どもも出てきた。役割分担というか、役を決め、何をするのか決めて（ということをするのだ）が、保育者がいないと流される。（遊びの）内容は「修行」と「おかし作り」。イメージをもたせたい。	①保育者の声かけで何役になるか決める。 ②おかし作りをする。 ③「プリキュアの学校」のイメージから、「修行」「おかし作り」という行為が生まれる。 ④記録なし ⑤保育者が中心となって遊んでいる。子どもとイメージが合っていない。	・プリキュアや学校の特徴が具体的に思いつくように、絵本など読んだり、子どもが必要だと感じる物や空間と一緒に作ったりする。 ・自分たちで考える時間や空間を確保し、焦らず見守る。
(11) III-3 6月	プリキュアごっこ ・場づくりだけで終わったが、一遊びして、二遊び目に始まる（いつものメンバー）。隠れ場所「私たちの場所」がほしいのだろう。ついたてなどいいかもしれない。役割分担進まない。	①記録なし ②記録なし ③記録なし ④「プリキュアの学校」という自分たちの居場所を作っている。 ⑤役割分担は見られない。	・安心できる自分たちの居場所となるような空間、空間を作れるような物を提示する。
(12) IV-3 9月	プリキュアショー・白雪姫ごっこ ・冠やスティックを作ることを続けた後、ショーをしたと積み木・椅子を並べる。曲は適当に「アナと雪の女王」で、ダンスでなくて熱唱。（招待した）3歳児が「プリキュアじゃない」と嘆いていたが、本人たちは見てもらって満足。 ・プリキュアの場を作ろうと、木の家にカーテンをつけたら、白雪姫になった。保育者が熱演したらやりすぎたようだ。	①プリキュアとプリンセスのイメージのずれから、白雪姫になっていった。保育者と子どもの白雪姫のイメージにずれがある。 ②必要な装飾品を作る ③歌うこと、見てもらう行為を楽しんでいる。 ④カーテンをつけた木の家を白雪姫の家に見立てている。 ⑤ショーを見てもらうための客として3歳児を招待しているが、3歳児の思いには気づいていない。	・演技や行為を引き出すような空間を用意する。 ・3歳児の思いや、プリキュアとプリンセスなどずれている部分に気付く機会を捉え、プリキュアにこだわらず、共有できるようなイメージを引き出す。
(13) IV-4 9月	プリキュアごっこ ・園庭の木の家を飾りつけ、掃除やご飯作り。恐竜（ごっこをしている子ども達）もやって来る。（一緒に使える）遊び場や風呂として巧技台など使う様に提案する。サーキットにしたい。イメージが必要。	①③プリキュアのイメージではなく、お家ごっこイメージで行為している。 ②お家ごっこのイメージで家事をしている。 ④自分たちの居場所として飾りつけをし、遊び空間を作っている。 ⑤他の遊びをしている子どもを受け入れる。	・役のイメージを引き出し、演じる楽しさも味わえるようにする。 ・他の遊びの友達と関わる機会を捉え、関わりを広げ、遊びのパターンに変化を誘う。
(14) IV-5 9月	プリキュアごっこ ・園庭の木の家で場所づくり。カーテンが目印。恐竜もやさしければはいていいとのこと。スイーツをどうやって作るかでもめて、なかなか（遊びが）進まない。	①記録なし ②③スイーツを作るという行為が提案されるが作るまで至っていない。 ④カーテンが目印となり、プリキュアの居場所空間が安定した ⑤それぞれの思いをぶつけあっている。	・演じる楽しさも味わえるようにしたり、子どもの思いを受け止めながら、「プリキュアごっこ」とスイーツづくりのイメージのつながりを一緒に考えたりする。
(15) IV-6 10月	プリキュアごっこ・ダンスショー ・園庭の木の家が別の遊びの場所になり、また運動会前で使用禁止となっていたので（保育室で）小道具作りをするぐらいだが、気持ちはプリキュアである。ダンスショーをする時の選曲は結局「アナと雪の女王」になる。	①プリキュアと言っているが演じてない。 ②小道具作り ③ダンスをして見せる行為を楽しんでいる。 ④基点となる場所がなくなり、舞台を作り、ダンスショーの空間を作った。 ⑤ショーを見てくれる相手が必要である。	・「ごっこ遊び」の終焉とみなし、他の遊びへ移行するきっかけをつくる。
(16) V-7 11月	プリキュアごっこ ・やるやると場は作ったが、冠作り派と普通の製作にわかれ、ばらばらになり進まず。	①記録なし ②物作りのみに終わっている。 ③記録なし ④場を作る。 ⑤ばらばらになっている。	・他の遊びの停滞と捉え、他の遊びの援助をする。
(17) V-8 12月	ダンスショー ・久しぶりにドレスを出して、（スズランテープ製）みつあみの冠をつけて、ダンスショー。「勇気100%」を選曲し、「なべなべそこぬけ」をずっとやっていた。社交ダンスのイメージだろうか。	①②装飾品を身に付けてプリンセスに変身している。 ③ダンスすること、見てもらうことを楽しむ。 ④記録なし ⑤以前の遊びのパターンで、友達と遊びが共有されている。	・他の遊びの停滞と捉え、他の遊びの援助をする。

びをしていたようだ。「イメージをどうするかふらふらしているの、保育者の仲介が必要(5)」と書いているが、具体的な援助についての記録はない。(7)を見ると「舞台や城」「カセット」を用意し、コンサートの方向でプリンセスの「ダンスショー」空間を設置している。保育者が用意した空間で遊ぶことは楽しめても、自分達では継続せず、翌週(8)にはバラバラな「プリキュアごっこ」に戻り、(9)で今度は「プリキュア学校」の空間を保育者が提示している。

「プリキュア学校」も、何をするのかという行為が生まれにくいまま、空間づくり「④空間=～にするオモシロサ」が主になっていき、(12)で「プリキュアショー」に戻り、(13)「プリキュアごっこ」としておうちごっこのような行為が生まれ、他の遊びをしている子どもとの関わりが見られるようになっていく。

子ども達はプリンセスやプリキュアに変身し、仲間と一緒に、装飾品をつくらったり居場所となる空間をつくらったりすることにオモシロサを感じていたものの、何をしたいのか役の特徴や行為が自分達では思いつかない状態のまま、「城や舞台」「学校」などの保育者が用意した空間に合わせて遊んでいたようである。記録からは物や空間への援助の工夫は読み取れるが、「①役=～になるオモシロサ」を十分味わっているのかどうか振り返るような記述はほとんどない。

八木と共に保育研究をしていた師岡は「ごっこ遊び」は「自分でない、他の存在、特に憧れる存在になりたいという要求によって成り立つ」ため、「①役=～になるオモシロサ」の要素が先んじて引き起こされるとしている²⁷⁾。さらに「この点を見過ごし、大人にとって目に見える形の内容が際立たないと評価しきれない」保育は見直しが必要と指摘している²⁸⁾。これらの指摘から⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっこの記録を捉え直すと、保育者として必要であったのは、まず子どもにとってのプリンセスやプリキュアがどういう存在であるのか、子どもと一緒に向き合う姿勢だったのではないだろうか。

子どもがなぜプリンセスやプリキュアになりたいのか探り、どのような特徴をもっているのか共有し、イメージが乏しければ絵本などの物語に触れ、子どもからイメージが湧き上がってくるような援助があれば、遊びの発展が違ったものになったと考える。プリンセスやプリキュアのことを子どもがよく知っているとは限らない。乏しいイメージから引き出すだけでは遊びは継続しない。実際、表1 VI期の④猫ごっこは、同じくVI期にクラス全体で「桃太郎」のお話(劇)遊びをしたことが共通体験となり、展開していたと考えられる。物や空間は視覚支援ともなり、友達と一緒に遊ぶ時のイメージの共有に役立つが、「ごっこ遊び」はまず「①役=～になるオモシロサ」をどのように感じているのか探り、イメージが湧き上がるような共通体験や物語

の提示も必要である。好きな遊びでの「ごっこ遊び」では、子ども自らなりきっていることが前提であるため、見落としがちなのかもしれない。また友達関係を広げなくてはと焦る気持ちが、「ごっこ遊び」の中心である「①役=～になるオモシロサ」をないがしろにしてしまったのかもしれない。まず一人一人の子どもが役になりきることを楽しめるように、役のイメージがわきあがってくるような援助を工夫するべきであったらう。

IV-3-2. 保育者の関わり-子どもの思いと保育者の思いのずれ-

IV-3-1でも触れているが、⑦プリンセスごっこ・プリキュアごっこにおいて、表2(1)～(3)「プリンセスごっこ」では「舞台・馬車」などを用意し、「プリンセスが城へ馬車で行く」というストーリーを保育者が提示している。表2(4)～(7)「プリキュアごっこ」では「ダンスショー(プリンセス)」の場を用意し、(8)～(11)にかけては「プリキュア学校」を保育者主導で作っている。さらに表2(12)では「白雪姫」を保育者が熟演し、(13)では「恐竜ごっこ」の友達と一緒に遊べるようにサーキットを提案している。いずれも、保育者が一緒に遊んでいる時はそれなりに楽しむ姿はみられても、その後子どもだけで継続することは難しく、遊びの発展にはつながらなかったようだ。保育者の援助が、子どもの思いとすれ違い、同じような過程を繰り返している。

そもそも子どもたちは表2(1)に記録されているように、元B組女児5人が一緒に過ごすことで安心しており、「⑤人・かかわり・組織=～とするオモシロサ」の中の特定の友達と一緒に遊びたいという思いが一番強かったと思われる。その点は把握していたようだが、表2(2)にあるように、翌週には「ストーリーがない」と考えて「舞台・馬車」を用意し、(3)では「おそろいを楽しむ」と読み取っていても「『ごっこ遊び』ではない」と捉えて、(4)では「役割があるといいのではないかと書いている。表2(11)になってようやく「隠れ場所『私たちの場所』がほしいのだろう」と考え、(12)で木の家に目印となるカーテンを付けて環境を整えることで、居場所を確保している。保育者が「『ごっこ遊び』らしさ」を求め、目の前の子どもの思いや状況を尊重していなかったのではないかと省察できる。この時感じていた「『ごっこ遊び』らしさ」とは、イメージ豊かな「ストーリー」があり、「役割分担」をして友達とやりとりすることであったと考えられる。

保育者が思い描く「ストーリー」は、「馬車でお城に行くプリンセス(2)」「客を呼んでショーを見せる(7)(12)(15)」「学校で活動をする(9)～(11)」などであり、「たたかう(4)(9)」「スイーツを作る(10)(14)」はイメージと合わないと思えていたようだ。IV-3-1で述べているように、子どもにとってのプリンセスやプリキュアがどのようなものか探ったり、イメージをもてるような

援助をしたりすることなく、保育者が考えたプリンセスやプリキユアのイメージで物や空間を用意している。さらに、プリキユアごっこではなく、プリンセスごっこの方が望ましいと考えていたため、表2(7)のようにプリキユアごっこをしている子ども達に「ダンスショー（プリンセス）」を提示したのではないと思われる。結果として子どもの思いとずれ続け、「ごっこ遊び」がうまくいかないと悩んでいた。

「ごっこ遊び」がうまく援助できていないと悩みながら、なぜ目の前の子どもの思いや姿を素直に捉えられなかったのかについては、保育者が自分の思い込みを自覚していなかったことが原因であると考えられる。前述したように保育者が考える「『ごっこ遊び』らしさ」に固執し、子どもの思いとずれた環境やストーリーを提案している。無自覚のまま、何度も同じような援助を繰り返し、うまくいかないと悩んでいた。思い込みを自覚することで、子どもの思いや姿を素直に受け止めることができるようになるのではないだろうか。

「オモシロサの5要素」は子どもが感じている「ごっこ遊び」のオモシロサから見出された要素である。「オモシロサの5要素」の視点から保育を振り返ることで、子ども側の思いを捉えようとする姿勢が生み出される。「ずれ」自体は八木のいう「異化」にも通じ、遊びを発展させたりかわりを広げたりするエネルギーにもなるが、「ずれ」を無自覚に行うか、意図的に行うかで保育者の援助は大きく異なる。保育者自身の思考の傾向や思い込み、子どもの思いや状況、育ちなどを客観的に捉える視点が必要であり、八木の「オモシロサの5要素」は両者の「ずれ」を把握するために有効であった。保育者自身の思い込みを自覚し、子どもの姿に寄り添い、共に面白がる姿勢が「ごっこ遊び」の充実につながっていくだろう。

IV-3-3. 子どもの人間関係

IV-1やIV-3-2で述べているように、20XX年4歳児D組の子ども達は、元B組と元C組の子どもが互いになかなか慣れず、関わって遊ぶようになるまで時間がかかっていた。中でも㊦プリンセスごっこ・プリキユアごっこをしていた元B組女児5人は、常に一緒に過ごすことで安心していた。進級して環境が変わったことへの不安を乗り越えるために必要なことであったのだろう。しかし保育者は、早くいろいろな友達との関わりを広げてほしいと願い、強引とも思える援助をしていたと考えられる。保育者経験が15年以上あり、「そろそろ関わりが広がっていくだろう」という保育者の経験知と、目の前の子どもの姿がずれていくことへの焦りが強かったのだろう。しかし、5人の子ども達の人間関係や遊びの内容に変化がないと感じていたが、記録を見直すと変化は表れていることがわかる。

「役割分担」について表2に「役割があるといいのでは(4)」「役割分担進まない(11)」などと書いているが、

「⑤人・かかわり・組織=～とするオモシロサ」の視点から見直すと、「同じクラスだった友達と一緒にいたい(1)」「友達とお揃いの物を身に付けることで仲間であることを確認している(3)」という段階であった子ども達から、「イメージリーダー(6)」が出現し、「ダンスを見せる人、見る人、看病する人、看病される人の役割分担が見られる(7)」というように「仲間意識」を感じながら、「役割分担」をしており、「組織」の芽生えも見られている。子どもたちのベースで、友達と関わりながら「ごっこ遊び」が発展していたことがわかる。5人の子ども達は、同じ物を身につけ、イメージを共有することにオモシロサを見出していた。イメージを共有する楽しさが仲間意識につながり、安定して過ごしながら役割分担をするようになっていく。5人の人間関係の詳細な記録はないが、㊦プリンセスごっこ・プリキユアごっこの終焉後は、他の子ども達と関わりながら遊ぶ姿が見られるようになっていく。一見同じような内容の遊びが繰り返されているように感じられても、変化しているのである。保育者の経験値からの子どもの発達のだ筋に、目の前の子どもを無理やりはめこもうとするのではなく、ありのままの姿を受け止め、子どもの力を信じて個々の育ちのペースを尊重し、それぞれの小さな変化をみとる姿勢が重要である。

V. まとめと今後の課題

本研究では、八木の「オモシロサの5要素」を中心とした視点から、保育者の記録を分析し、4歳児の「ごっこ遊び」を支えるにあたって抱えていた保育者の課題を明らかにし、役、保育者の関わり、子どもの人間関係に焦点を合わせて考察した。

本研究で取り上げた記録では「①役=～になるオモシロサ」の視点が欠けていたため、「ごっこ遊び」の中心的な位置を占める「なりきる楽しさ」に向き合っていなかったことがわかった。保育者が保育に対してうまくいかないと感じている時、多角的に記録を見直すことで、課題を明確にすることができる。4歳児の「ごっこ遊び」では装飾品を身につけて何かの役になったと宣言するだけではオモシロサが発展していきにくい。役になり「演じる」楽しさにつなげていく援助の必要性を見出すことができた。

また、保育者の思いと子どもの思いのずれが、遊びの発展を阻んでいたことが明らかとなった。子ども側の視点である「オモシロサの5要素」で記録を捉え直すことにより、保育者の思い込みが強引とも思える保育者の援助につながったのではないかとということが考えられた。日々の忙しさの為に保育をゆっくり振り返る余裕もなく、ベテランともなると経験知や思い込みで保育を進めてしまう危険性は常にひそんでいる。詳細な記録をとることも難しい。しかし本研究で取り上げたような簡単な記録であっても、八

木の「オモシロサの5要素」の視点から分析する事で、子どもを捉える保育者の視点の偏りや、思い込みを明らかにすることができた。子どもが何を面白いと感じているのか、保育者はどのような子どもの姿を望んでいるのかを省察し、子どもの思いとのずれを自覚することにより、子ども自身が楽しい「ごっこ遊び」をつくりだせるような援助を考えることができるだろう。「4歳児なのだから、友達との関わりを広げてほしい」というような保育者の思いにとらわれた保育者主導の援助になっていないか、子どもの姿をありのままに捉えているのかどうか省察する姿勢が重要である。

保育者の偏った援助にもかかわらず、㊦プリンセスごっこ・プリキョアごっこは長く続いた。同じ友達と、同じようなアイテムを身につけ、同じ場において、同じようなやりとりを繰り返す遊びの中で、子どもはイメージを共有する楽しさから仲間意識を感じ、安定感を得ていた。同じパターンの遊びを繰り返しているように見えても、少しずつ子どもの関係性や遊びの内容が変化しており、その変容をみとり見守る姿勢が不可欠である。

幼稚園教育要領には、領域「人間関係」のねらいとして「(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう」「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」「(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」が示されている²⁹⁾。「ごっこ遊び」もまず安心し、自分で遊ぶようになることから始まる。一人一人の子どもの興味・関心を把握し、「ごっこ遊び」をより楽しい遊びに発展することを支えることにより、「ごっこ遊び」の中で子ども達は友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、望ましい習慣や態度を身に付けていこう。本研究で取り上げた保育記録では、クラス替えにより不安定な気持ちを抱えていた4歳児の思いよりも、友達との関わりを早く広げたいと願う保育者の思いが先行していたことが、「ごっこ遊び」の発展を阻む原因となっていた。一人一人が安心して楽しく「ごっこ遊び」ができるように支えることが土台となって、遊びがつながり、友達がつながっていく。保育者は自身の思考の偏りや思い込みなどの課題を自覚し、素直に目の前の子どもと向き合う必要がある。

本研究において、筆者自身の過去の保育記録と向き合う機会を得たが、それは保育者としての至らなさを受け止める作業となった。自分の保育記録と向き合うことは新たな発見と同時に辛さも伴うが、保育者の専門性を向上させる為に不可欠な営みである。本研究で得られた知見を、今後の保育者養成に生かしていきたい。

文献

- 1) 野尻裕子：ごっこ遊び，保育用語辞典第8版，森上史郎・柏女霊峰（編），ミネルヴァ書房，70，2016.
- 2) 高橋たまき：想像と現実－子どものふり遊びの世界，ブレーン出版，4，1989.
- 3) C・ガーヴェイ：「ごっこ」の構造－子どもの遊びの世界－，高橋たまき（訳），サイエンス社，148，1980.
- 4) 河邊貴子・田代幸代：遊びが育つ保育～ごっこ遊びを通して考える，フレール館，18，2020.
- 5) C・ガーヴェイ：「ごっこ」の構造－子どもの遊びの世界－，高橋たまき（訳），サイエンス社，1980.
- 6) 高橋たまき：想像と現実－子どものふり遊びの世界，ブレーン出版，1989.
- 7) 利根川彰博：幼児のごっこ遊びにおける「役割」についての検討－幼児が「何者かになっている」ということの位置づけに注目して－，秋草学園短期大学紀要，38，113-125，2021.
- 8) 二橋香代子・上田敏丈：ままごとに対する保育者の遊び理解に関する研究，名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，18，85-95，2012.
- 9) 長橋聡：子どものごっこ遊びにおける意味の生成と遊び空間の構成，発達心理学研究，24（1），88-98，2013.
- 10) 師岡章：第1章ごっこ遊び実践の現状と課題，八木紘一郎（編著），ごっこ遊びの探求－生活保育の創造をめざして－，新読書社，31-32，1992.
- 11) 無藤隆：第Ⅱ部「幼稚園教育要領」解説とポイント，汐見稔幸・無藤隆（監），平成30年施行 保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント，ミネルヴァ書房，360，2018.
- 12) 前掲書4），19.
- 13) 八木紘一郎：ごっこ遊びの探求－生活保育の創造をめざして－，新読書社，1992.
- 14) 師岡章：第2章第1節ごっこ遊びの定義，八木紘一郎（編著），ごっこ遊びの探求－生活保育の創造をめざして－，新読書社，41，1992.
- 15) 前掲書13），45-56.
- 16) 同上，67.
- 17) 同上，67-71.
- 18) 同上，71-76.
- 19) 同上
- 20) 同上，76-77.
- 21) 同上，77-79.
- 22) 同上，79-81.
- 23) 利根川彰博：ごっこ遊びにおける意味づけに関する事例的検討－ゴブニックのごっこ遊び論と4歳児の「どら焼きごっこ」における「どら焼き」の意味づけ－，秋草学園短期大学紀要，37，124-138，2020.

- 24) 前掲書13), 68.
- 25) 師岡章：第3章第2節展開の筋道とそのしくみ, 八木紘一郎（編著）, ごっこ遊びの探求－生活保育の創造をめざして－, 新読書社, 87-88, 1992.
- 26) 同上, 88-103.
- 26) 同上, 87.
- 27) 同上, 87-88.
- 29) 文部科学省：幼稚園教育要領, 2018.

